

三者三様

勝海舟○榎本武揚○土方歳三

子孫が語る
幕末幕臣

第19回勝海舟フォーラム2025

Three Distinct Paths of
Bakumatsu Shogunate Retainers

Katsu Kaishu, Enomoto Takeaki, Hijikata Toshizo

2025年7月21日(海の日 祝日) 9:30~
(開場9:00)

参加無料 申込み不要 先着順 【会場】すみだリバーサイドホール

【主催】勝海舟顕彰会 【後援】墨田区・一般社団法人 墨田区観光協会・東京向島ロータリークラブ

第19回 勝海舟フォーラム2025

子孫が語る 幕末幕臣 三者三様

Three Distinct Paths of Bakumatsu Shogunate Retainers

～勝海舟・榎本武揚・土方歳三～

基調講演『碧い目の玄孫きたり』

海舟の三男・梅太郎は明治19年、アメリカ人女性・クララ・ホイットニーと結婚しました。梅太郎とクララのご子孫であるダグラス氏とエリン氏をお招きし、お話を伺います。



高山みな子氏 勝海舟玄孫・ライター

慶應義塾大学文学部卒業。会社勤務を経て旅行・紀行雑誌、企業広報誌などの執筆活動をしつつ、勝海舟子孫として講演や各種イベントに参加。高知県観光特使、長崎市観光大使、三重県松阪市ブランド大使、東京都港区観光大使を務める。共著に「勝海舟関係写真集」(出版舎 風狂童子)、「日本全国ユニーク個人美術館」「日本全国ユニーク個人文学館・記念館」(新人物往來社)など多数。

ダグラス・オールデン・スティフラー氏

勝海舟の五代目の子孫。博士。1989年にハーバード大学を卒業。2002年にはカリフォルニア大学サンディエゴ校で中国近代史の博士号を取得。



エリン・キーファー・トゥルー氏

勝海舟の五代目の子孫。ペンシルベニア州フィラデルフィア在住のアーティストで元デザイナー。今回が三度目の来日となる。



特別鼎談『子孫が語る 幕末幕臣 三者三様』

【司会】高山みな子氏(勝海舟玄孫) × 榎本隆充氏(榎本武揚曾孫) × 土方愛氏(土方歳三兄子孫)



榎本隆充氏 榎本武揚曾孫・梁川会会長

1935年東京生まれ。1989年梁川会会長。2001年東京農業大学客員教授。2007年開陽丸子孫の会会長。2008年武蔵野大学特別講師。幕末史研究会名誉会長。主な著書に「近代日本の万能人「榎本武揚」(藤原書店)、「榎本武揚未公開書簡集」、「北海道不思議辞典」、「榎本武揚の妻多津」(以上、新人物往來社)など。



土方愛氏 土方歳三兄子孫・土方歳三資料館館長

土方家の家督を継いだ土方歳三の兄・喜六隼人(きろくはやと)の6代目子孫。日野市石田にある歳三生家に生まれ育ち、現在は土方歳三資料館館長。明星大学客員教授。著書に「子孫が語る土方歳三」「土方歳三資料館図録」など。

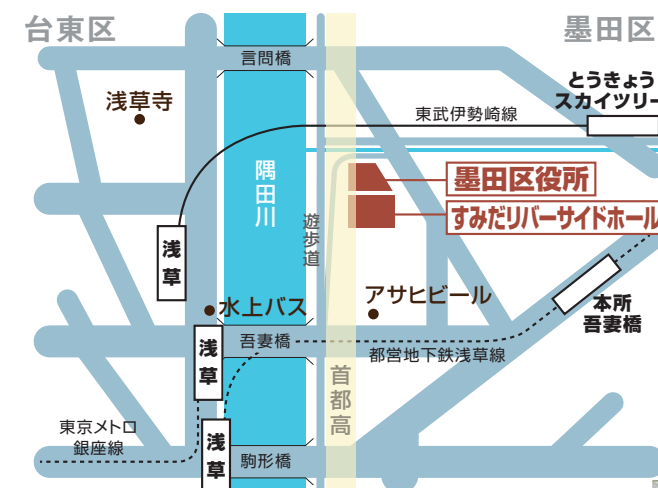
参加無料・申込み不要・先着順
どなたでもご参加できます!!

※定員700名先着順となります。(入場制限あり)

2025年7月21日(祝日・海の日)

PROGRAM プログラム

- 08:45 献花式(勝海舟銅像前) ※献花は関係者のみ
- 09:00 開場
- 09:30 開会・挨拶
- 09:50 基調講演『碧い目の玄孫きたり』
高山みな子氏(勝海舟玄孫)
- 10:20 特別鼎談
『子孫が語る 幕末幕臣 三者三様』
榎本隆充氏 土方愛氏 【司会】高山みな子氏
- 11:30 閉会



【会場】すみだリバーサイドホール 東京都墨田区吾妻橋1丁目23-20

東武伊勢崎線「浅草駅」正面口から約5分／東京メトロ銀座線「浅草駅」5出口から約5分
都営地下鉄浅草線「浅草駅」A5出口から約5分／都営地下鉄浅草線「本所吾妻橋駅」A3出口から約5分
最寄のバス停は「墨田区役所」「本所吾妻橋」「リバーピア吾妻橋」

【主催】勝海舟顕彰会 【後援】墨田区／一般社団法人 墨田区観光協会／東京向島ロータリークラブ

【協力】公益社団法人 東京青年会議所 墨田区委員会／日本大学校友会東京都第六支部／向島消防少年団 【デザイン】サンビース・グラフィックス 【作成】三澤敏博
【写真出典】勝海舟肖像(横浜開港資料館蔵)／榎本武揚肖像(国会図書館蔵)／土方歳三肖像(土方歳三資料館蔵)／『明治時代の隅』(アムステルダム国立美術館蔵)

【お問合せ】実行委員会 E-mail▷ kaisyuforum@gmail.com (※お問い合わせの受付は7月1日～20日の午後6時までの限定となります)

界隈に遺る勝海舟・榎本武揚・土方歳三の足跡

それぞれの隅田川

隅田川は、江戸の人々にとって単なる水路ではなく、生活を支え、四季折々の風景を映し出し、ときには心の拠り所ともなる存在でした。

若き日の勝海舟もまた、この川辺を歩き、**剣と禪の修行**に励みました。隅田川は海舟にとって、青春と志の出発点だったのです。

やがて慶応四年、京都・鳥羽伏見で戊辰戦争が勃発し、江戸の隅田川にも、不安の影がゆらめきはじめます。江戸に戻った土方歳三ら新選組は、海舟の了承をもとに、甲府城を接收すべく出陣しますが、新政府軍に敗れました。江戸に退いた土方や近藤勇らは**向島小梅村**の某家に潜伏したと伝わります。

その後、土方らは下総流山に移りますが、局長の近藤勇が新政府軍に捕らえられました。土方は近藤の救出を目指し、赤坂の海舟を訪ねて協力を求めます。海舟はこれに応じましたが、ついに救出はかきませんでした。

土方たちは四月十日、今の慶義寺に「泊し、江戸城が新政府軍に明け渡された翌十二日、**隅田川を渡って向島小梅村**へと移動しました。土方にとって、この日が江戸との別れであり、最後の隅田川となりました。そして市川へ向かい、大鳥圭介と合流します。大

げて、徳川家の移封地となった駿府へと移りました。

維新後の隅田川と海舟

明治二年五月、土方歳三は函館で銃弾に倒れ、その六日後に榎本軍は降伏。箱館戦争は終結しました。

たびたび新政府に召還されていた海舟は、明治五年五月に赤坂に居を構え、東京と改められた江戸の地へ戻ります。一方、捕らえられていた榎本らも同年三月に放免され、開拓使に出仕しました。

明治七年、榎本は駐露特命全権公使に任命され、ロシアとの樺太国境交渉を担当します。出立の四日前、榎本は**両国橋にあった料亭「中村楼」**に海舟を招いて、語り合いました。海舟は榎本の求めに応じて自身の写真を贈ったほか、ラッコの毛皮二枚を防寒具に贈っています。

榎本が帰国したのは明治十一年のことです。この頃、榎本は**向島に別邸**を購入しました。明治十三年三月六日には、海舟もこの別邸に招かれ、自身の日記に「榎本、向島邸へ訪ねる。大酔」と綴っています。「大酔」とあり、何を語り合ったか、非常に打ち解けあった一日であったことが伺えます。この別邸は**桜の名所・墨田堤**に近く、榎本

鳥は十一日の深夜、旧幕府軍の脱走兵と**法恩寺（墨田区太平）**で集結し翌日、市川で土方と合流したのです。

彼らは各地で戦いを続け、会津を経て八月、仙台で榎本武揚率いる旧幕府艦隊と合流、函館・五稜郭へと移っていきました。

榎本武揚が旧幕府軍艦を率いて江戸を脱した際、海舟は

さみだれに
しばしはにこれ 隅田川
すむをつねなる よしにあらねば

と詠みました。隅田川の「濁り」に、時代の混乱と仲間たちの選択を重ねていたのでしょうか。

「すむをつねなる よしにあらねば」——澄んでいることが常とは限らない。榎本らの決断もまた、時代の大きな流れの中で生まれたひとつの必然として、海舟は静かに受けとめていたのです。

そして海舟も
つねだにも
住ままくほしき 隅田川
わが故郷と なりにけるかな

と詠み、同年十月、隅田川に別れを告

はよく風光明媚な隅田川の風景を愛でながら酒を嗜んでいたと伝わりま

す。榎本は「**墨堤植桜碑**」にも揮毫を残しています。海舟もまた、友人らと隅田川で花見をした記録があり、榎本から花見へ招待されたこともあり

ました。

隅田川の「八百松は、海舟がよく足を運び、親しく交流した料亭ですが、榎本もしばしば利用していたようです。彼らは明治という新時代の中で、落ち着きを取り戻した隅田川の流れを心から愛しました。

やがて東京寛都から三十年となる明治三十一年、海舟はかつて駿府に旅立つ際に詠んだ歌に對をなすように、次のように詠みました。

たちかへる
我が古里の 墨田川
昔忘れぬ 花の色かな

晩年まで隅田川を愛し続けた海舟は、この翌年に亡くなりました。榎本も明治四十一年、向島の邸宅で静かに息を引き取りました。

現在、隅田川沿いには、勝海舟と榎本武揚、それぞれの銅像が建立され、時代の流れを見つめながら、静かに隅田川を見守っています。



榎本武揚像
堤通2・6・11



八百松跡
吾妻橋1・24付近

海舟が愛し、榎本もよく足を運んだ料亭跡。



墨堤植桜碑
向島5・4

墨堤の植桜を記念した碑。篆額は榎本の筆による。



榎本武揚別邸跡
向島5・12

榎本の別邸跡。晩年は当地で暮らした。



中村楼跡
両国1（隅田川沿い）

海舟がロシアに旅立つ榎本と会った料亭跡



法恩寺
太平1・26・16

大鳥圭介ら旧幕府伝習隊が集結した



三囲神社
向島2・5・17

海舟が雨乞いの歌を奉納したという神社



牛嶋神社趾
向島5・3

海舟が剣の修行に励んだ移転前の牛嶋神社跡



弘福寺
向島5・3・2

若き海舟が禅修行に励んだ寺



勝海舟像
吾妻橋1・23